

「よにおほかるそらごとだにあり」の解釈

—蜻蛉日記の執筆意図にふれて—

武 山 隆 昭

一 問題の所在

蜻蛉日記の冒頭、序文といわれる一節は、次のように書かれている。

かくありしときすぎて、世(の)中にいとものはかなく、とにもかくにもつかで、よにふる人ありけり。かたちとても人にもにず、こ(こ)ろだましひもあるにもあらで、かうものゝえうにもあらであるもこと(こと)はりとおもひつゝ、ただふしをきあかしくらすまゝに、世(の)中におほかたふるものがたりのはしなどをみれば、よにおほかるそらごとだにあり。人にもあらぬみのうへまでかき日記して、めづらしきさまにもありなん、天下の人のしなたりきやとはんためしにもせよかし、とおほゆるも、すぎにしとしつ

きごろのこともおほつかなかりければ、さてもありぬべきことなんおほかりける。(喜多義勇『全譜蜻蛉日記』による。底本は宮内庁書陵部蔵桂宮本。()内は、喜多氏が校訂されたもの。)

ここには、作者の日記執筆意図が、上巻末跋文と呼応した形で述べられているが、難解で、いまだ定説と云える解釈をみていない。

特に、「よにおほかるそらごとにあり」の解釈については、次に示すように、諸注釈書それぞれに苦心のあとが見うけられるものの、どの説も今一步すっきりしない感がある。いま一つの試案を得たので、ここに述べて大方の御批判を仰ぐことにしたい。

二 諸注釈書の解釈

まず、管見に入った注釈書が、この部分をどのように解釈しているかを、大きく二つに分け、さらにそれぞれを三つに分けて示す。

(一) 「だに」を、単に「サエ」と訳しているもの

(一)―(1) 「よに」を、「全ク」「タイヘン」「マコトニ」等と訳しているもの

“全く多くのそらごとさえ書かれている。”(喜多義勇『全講蜻蛉日記』至文堂、昭36・12)

“たいへん多くのつくりごとさえ書いてある。”(山岸徳平『評訳平安日記文学』旺文社、昭43・1)

その他、加藤正雄『かげろふ日記要解』有精堂、昭50・2など、学参(巻1)七種類も同様の解釈。

(一)―(2) 「よに」を、「世間ニヨクアル」「世間ニアリフレタ」「アリキタリノ」等と訳しているもの

“世間に多い真実でない話さえある。”(村瀬英一『蜻蛉日記の探求』有朋堂・昭37・2)

“まったくこの世にも多く行われている嘘いつわりごとでさえも書かれている。”(大西善明『蜻蛉日記

新注釈』明治書院、昭46・11、旧稿『新釈』も同趣)

その他、関根慶子『紫式部日記・蜻蛉日記』学燈文庫、昭31・10、三宅清『かげろふ日記抄』著者蔵版、

松井簡治『蜻蛉日記』雄山閣も同様の解釈。なお、川口久雄校注の岩波日本古典文学大系は、「よに」を無視した注釈となっているが、一応この項に入れておく。

(一)―(3) 「よに」を「男女ノ仲」「夫婦関係」と解する説

“そこには結婚にはつきものの、甘い甘い作りごとが書いてあるではないか。”(萩谷朴『蜻蛉日記の問題点と新説』学燈社『国文学』昭34・7)

(一) 「だに」を、「サエ」、マシテハナオサラ〜と考え、類推用法であることを意識して解釈しているもの

(一)―(1) 「モテハヤサレテイル」等とするもの

“ありきたりの現実性のない作り事でさえもてはやされるのに、人並みでもない身の上でも日記としてありのままに書いてみたら、なおのこと珍しく思われることであろう。”(木村正中・伊牟田経久『日本古典文学全集土佐日記、蜻蛉日記』小学館、昭48・3)

“どれもこの世に実在しないような作りごとばか

り、それでさえももてはやされているので、つまり、それでない自分の身の上でも日記としてありのままに書いてみたら、なおのこと、珍らしく思われるであらう。”（上村悦子『蜻蛉日記（上） 全訳注』講談社学術文庫、昭53・2）

他に、長沼治『バイタルズ蜻蛉日記・紫式部日記解 釈の基礎』研数書院、昭49・3も同趣。

(二) 2 「イタダケナイ」「ツイテイケナイ」等とするもの

“平凡な作り話でさえいだけないのに、人並でもない身の上のことまで日記に書いたのだから、なおのことひどいものだろう。”（大木正義『蜻蛉日記・紫式部日記新解』新塔社、昭40・9）

“ありふれた作りごとさえついてゆけないのに、なおのこと、ろくでもない身の上話まで書いたこの日記は、読んでいただけるかしら。”（柿本奨『蜻蛉日記全注釈 上巻』角川書店、昭41・8）

他に、柿本奨『蜻蛉日記』角川文庫、昭42・11、橋豊・田口守『蜻蛉日記』桜楓社、昭53・4、石田穰二氏説（注2）も同趣。

(二) 3 「物語ノ世界ニ、作者ノ不幸ヲ救済スル力ガナク、ソレラハ現実トハアマリニモ無縁ナ存在

デサエアツタノダ」と解釈するもの

“それらは似たりよったりの、現実性のない作りごとだとさえ私には思われる”（秋山 虔・上村悦子 木村正中『蜻蛉日記注解 一』、『国文学解釈と鑑賞』三二〇号、昭37・5）

分類の方法について補足する。(一)では、(二)のような評価の観点に立っていないので、「よに」の解釈によって分類し、(二)では、「よに」はすべて「世間で」の意に解して差のないこと、「マシテ〜」の「〜」の部分に解釈の差が存することに着目して分類したのである。

三 蜻蛉日記における「だに」の用法

助詞「だに」の用法についての説明を、文法書二十四種、辞典類十二種について比較したところ、副助詞、係助詞の対立はあるものの、意味・用法の説明に根本的な差異はなかった。

今は、金田一春彦先生編『新明解古語辞典補注版第二版』の記述をベースに、筆者の整理したものを示し、以下の考察の基礎分類とする。へただし平安時代の用法▽
——だに——

① 否定の語と呼応して、「セメテ……ダケナリトモ

- ……(ト願ウガソレモ……ナイ)の意。
- ② 否定文に用い、程度の軽い事がら、または可能性の少ない事からについて述べて、もっと程度の重い事や可能性の多いことについては、なおさらだ、当然だ、との意を言外にはめかし類推させるのに用いる。「……サエ……(ナイ、マシテ……ハ……ナイ)」の意。
- ③ 平叙文に用い、②と同様に用いる。「……サエ……(マシテ……ハ……)」の意。
- ④ 命令・請願・意志を表す文に用いて、大きな望みを捨て、最も小さな望みで、がまんする意を表す。「セメテ……ナリトモ」の意。
- ⑤ 仮定を表す語句に用いて、ありえそうもないことを仮定し推量する意。「万一……デモ」「万一……タラ」の意。
- ⑥ 事態がその程度にまで進んだ、意を表す。「……マデ」「……サエ」「……スラ」の意。
- 「だにあり」の連語は、本質的には③と同じである。蜻蛉日記に用いられている「だに」を、伊牟田氏の総索引にある六十六例から、本稿で問題としている一例を除いた。六十五例を分類すると、次の表Ⅰのようになる。

表Ⅰ

分類	意	味	体言十	その他
①	セメテ……ダケナリトモ (ソレモナイ)		3	5
②	……サエ……ナイ、マシテ……ナイ		10	4
③	……サエ……、マシテ……		10	10
④	セメテ……ナリトモ		5	13
⑤	万一……デモ、万一……タラ		2	3
⑥	……マデ、……サエ、……スラ		0	0

表Ⅰの作成段階で調査した結果、蜻蛉日記の平叙文(肯定文)に用いられた「だに」は、すべて③「……サエ……マシテ……」という類推の用法であることが判明した。したがって、前章(一)のごとく、単に「……サエ」と訳して、言外にはめかしてある内容を類推せずに解

釈することは、いかがかと思われる。そこで、(一)は除外して、(二)に検討を加えることとする。

四 「だに」が類推させる内容

(二)―(1)、(二)―(2)は、評価が異なるだけで、「だに」を中心とする文構造の把握のし方は同じである。

すなわち、「そらごとだにあり」の「あり」を連用形とみて、次の「……めづらしきさまにもありなん」までを一つづきの文と考えるのである。そして、「そらごとだに(めづらしきさまに)あり、(まして)人にもあらぬみのうへまでかき日記して(みたら、それは)めづらしきさまにもありなん。」とするのである。この考え方は、石田穰二氏説(注2)に基づくもので、文構造の把握という点からいえば、筋が通っている。問題は解釈である。

(二)―(1)は、「めづらし」の解釈を、「珍しくてすばらしい」「見訓れないので新鮮だ」と肯定にとらえたものであり、(二)―(2)は、「見訓れないので、ついてゆけない」と否定的に解したものである。

しかし、右の両説はともに解釈上無理をしていると思う。(二)―(2)は、「めづらし」の語義を否定的に解すると

ころに無理がある。この解の不適當なことは、「めづらし」と「めづらか」との混同によるものだとして、既に梅野きみ子氏が詳細に論述しておられる(註3)ので、今は述べない。(二)―(1)については、物語に多い「そらごと」を、作者が肯定していると解することに疑問を感じる。この点に関しては以下に述べるが、要するに、(二)―(1)の説は、文構造の把握という点では筋が通っていても、「めづらし」の語義解釈に無理をするか、作者の「そらごと」に対する考え方に無理な解釈をしなければ、成立し得ないものである。

蜻蛉日記の作者は、「ものがたり」に書かれている「そらごと」を、どのように考え評価していたかについて、私見を述べる。この問題は、蜻蛉日記の執筆意図をどうとらえるかにかかわる重大な問題である。(二)―(1)説のように「そらごとでさえもはやされるのだから、ましてノンフィクションの日記は、もっともはやされるだろう」という考え方で解すると、作者の日記執筆の意図は、はなはだ軽いものになってしまうのではないだろうか。これでは「事実小説よりも奇なり」と称して「実話読物」をもてはやすような、文学的次元の低い、興味本位ののぞき見趣味を満足させるために執筆したことになってしまう。この点に関しては、(二)―(3)の秋山虔氏らの

お説が妥当であるように思う。一部引用する。

作者の「古物語」否定は、作者が自らの真実を失わずに生きる道を、ただ物語の方法による以外に見出しえない切実な状況において、その切実さのゆえに自覚しえた事実である。おそらくどのような構想、どのような主題の古物語にも、その中に作者の要求と齟齬するものが感じられてならなかったであろう。自己の切実な課題に直接応えてくれないことが、まさに「そらごと」の内容というべきである。

すなわち、物語の世界に救いを見出すことができず、世間に多い「そらごと」に腹立たしさを覚える作者の精神が、のっぴきならないギリギリのところまで、「みのうへまでかき日記」することを思い切ったのだと思う。そして、序の部分のひかえめな叙述の裏に、むしろ日記文学という新しいジャンルを世に問おうとする意気込み、評価への自信めいたものさえ感じ取りたいのである。ちなみに土佐日記は男性の作であるし、生き方に関わるようなテーマではないから、ヒントにはなつたとしても、ライバル意識はなかったものと思う。上述のように、「そらごと」を否定するところから、蜻蛉日記は出発するのであるから、「そらごと」を肯定的にとらえる(一)―(1)説には従えないのである。

以上、(一)―(1)、(2)ともに満足できないことを述べた。

ここまでではっきりしたことは、「そらごと」と「かき日記して」を「だに」で結び、「めづらしきさま」という公約数でカッコにくくることが無理であるという事実である。すなわち、「あり」は連用形ではなくて、終止形と考え、ここで文を切って解さなくてはならないということがある。

次に、(一)―(3)について検討する。前述のように、「そらごと」の解釈については全く正しいのであるが、「注解」で、「だに」に注意する必要がある」とことわっているわりには、「通釈」(既に引用済み)が今一つすっきりしない。「注解」にいう。

作者の精神を培ってきた物語の世界に、作者の不幸を救済する力がなく、それらは現実とはあまりにも無縁な存在でさえあったのだ。ここに「世におほかる」と「そらごと」との結びつきが、はつきりしてくる思う。

「だに」の用法に注意する旨明記してあるため、(二)に分類したが、これでは、「だに」～「まして」～という観点ではなくて、「世におほかる」と「そらごと」の結びつきに意を用いた説明であり、「通釈」だけからいえばむしろ(一)に分類してもよい感じすらして、これまたもの足りないと言わねばならない。

かくして、現在刊行されている主たる注釈書の解釈は、「そらごとだにあり」の解釈についてだけ言えば、すべて満足できない、ということになる。そこで愚考を凝らした結果、「世に多かる虚言だに（書きて）あり。（まして、偽りは多く書きてあり）」と解することを提案する。次章で理由を述べる。

五 「そらごと」と「いつはり」

「だに」の用法を、前述のごとく類推用法と考え、「あり」を終止形と考えると、同一文の中で「そらごと」と「より」も「程度の重い事」か「可能性の多いこと」を補って解釈しなければならぬ。

蜻蛉日記の中にも、

いふかひなき心だにかく思へば、まして異人はあはれと泣くなり。（天禄元年六月）

のように、「まして……」がはっきりと文中に出てくる例や、

（源高明を） つひに尋ねいでて流したてまつるときに、あいなしと思ふまでいみじうかなしく、心もとなき身だにかく、おもひしりたる人は、袖をぬらさぬといふたぐひなし。（安和二年三月）

のように、「まして」はなくても、類推の内容が本文に記述されている例もあるが、大部分は、「程度の重い事」「可能性の多いこと」は言外におかれ、読者の類推にゆだねた筆致となっている。例えば、

この世の中は、もがさおこりてののしる。……中略
……ことばにてぞ「いかに」といはせたる。さるまじき人だにぞ、きとぶらふめるとみる心ちぞそへて、ただならざりける。（天延二年八月）

は、「さほど親密というほどでない人でさえ見舞ってくれるようだ（から、まして最も親密な人「 \equiv 夫」は見舞ってくれるべきだのに）、と思う気持ちも添い加わって、心中穏やかでなかった。」と解釈することになる。

そこで、問題の箇所は、「そらごとだに \wedge A \vee あり。（まして \wedge B \vee は \wedge C \vee あり）」というパターンを設定し、 \wedge Vの中に補うべき語句を考察する手順になる。問題はBである。「そらごと」より、程度の重い事か可能性の多いことはいったい何であろう。筆者はそれを、「いつはり」であると考えたのである。（注4）

「そらごと」の「そら」は、「そらね」「そらみみ」「そらだのみ」などの「そら」で、実体のない空虚なことを表す語根である。「こと」は「言」でコトバの意である。したがって、「そらごと」は、「まこと（真言）」の対で、

実体も根拠も何もないのに、言葉の上で作り上げたこと、の意で、虚言・架空の作り話・荒唐無稽な話、の意である。次に一例を示す。

「忠雅が）なやみ給とてあるは、まとかそらごととか、たしかにあないしていへ」との給ふ。（『宇津保物語・国ゆづりの下』古典文庫前田家本）

「いつはり」は、動詞「いつはる」の連用形の転成名詞で、ある事がらをありのままに表現・評価せず、別の事がらとして表現したり、真実と異なった評価をすることをいい、うそ・虚偽の意である。全く火のない所から煙を立てるよりも、火のある所に別の色の煙を立てる方がはるかに容易であるように、「そらごと」よりも「いつはり」の方が、言いやすいのである。すなわち、「だに」の用法に即して言えば、「そらごと」より「いつはり」の方が、存在の可能性の多いことということになるのである。

横道にそれるが、罪の重さの程度から言うと、「いつはり」の方が重い。なぜならば、「そらごと」は、全く根も葉も無いことであるから、普通の人は騙されないだろうし、騙されても笑いごとで済む場合が多いのに対して、「いつはり」は、真鍮を金であると言つて騙すように、もことになる何かがあるため信じこみやすく、また、

意識して事実を曲げて話すことであるが故に、より罪深い、邪悪な行為であると言えるからである。

さて、本論にもどつて、「いつはり」の用例を示しつつ、平安中期において、「そらごと」「いつはり」の差違がどの程度意識されていたかを検討してみたい。

いつはりのなき世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからまし（『古今集』恋四・七二二）

この歌のように、他の人を愛しているのに私を愛していると、偽つて言うことは、といった用法が多い。

さて、このいつはりどもの中に、「げに、さもあむ」と、あはれを見せ、つきづきしく続けたる、はた、はかなしごとと知りながら、いたづらに心うごき、らうたげなる姫君の物思へるを見るに、かた心つくかし。（『源氏物語・螢』大系本）

有名な物語論の所である。住吉の姫君に己を擬えて、物語の世界と現実の世界とを混同しかねないほどに、物語を熱愛する玉鬘やその他の女性達に、光源氏は言う。

「女は人に欺かれようとして生まれたようだ。物語の中にまこととは少ないのに、それを承知で、心を移したまされてはいる。」ここには、作者の物語観が、光源氏の口を借りて述べられているといわれている。物語は「いつはり」が書いてあつて、「まこと」はいと少なからむと言

表 II

	いつはり	いつはりども	そらごと	そらごとども
古事記	2	0	0	0
万葉集	3	0	0	0
竹取物語	0	0	2	0
伊勢物語	0	0	0	0
大和物語	1	0	2	0
宇津保物語	1	0	19	0
落窪物語	0	0	4	0
土佐日記	0	0	1	0
古今和歌集	6	0	0	0
枕草子	1	0	12	0
源氏物語	2	1	12	0
紫式部日記	0	0	1	0
和泉式部日記	0	0	1	1
計	16	1	54	1
蜻蛉日記	0	0	3	0

いながらも、引用部分では、その「いつはりども」の中に読者の興味を引く魅力を認めているのである。この「いつはりども」は、何かモデルになる人や事柄があって、それを脚色して物語にしたといった発想であると思われる。さらに言うならば、「いつはり」こそ、「日本紀」などは、ただ、片そぼぞかし」という紫式部の、レアリスム論を支えるキーワードであると考えるのである。すなわち、伝奇物語の「そらごと」とは異なる、現実には脚したレアリスムの文学をめざした紫式部は、「いつは

り」による物語の世界に、現実以上の真理を描こうとしたのだと思う。(道綱の母は、「そらごと」も「いつはり」も否定して、現実には価値を見出した。それに対し、紫式部は、「そらごと」と「現実」との矛盾を止揚して「いつはり」へ道綱の母の否定した「いつはり」とは次元が違うVという文学的真理の世界へジンテーゼVに到達したといえる。本稿の論旨に直接関係はないが、ねんのために書き添えておく。) 以上から、「いつはり」の語義は明らかに思ったと思われるが、螢の巻の先の引用箇所前後に、次のような

表現があるので、補足して一、二論じておきたい。

めづらかなる、人のうへなどを、誠にや偽りにや、いひ集めたる中にも、『源氏物語・蟹』

物よくいふものゝ、世にあるべきかな。空言を、よくし馴れたる口つきよりぞ、いひ出すらむ。(同右)

前者は、「いっはり」を「まこと」と並べた例で、語源的には前述のように、ソラゴト⇄マコト、であるが、真実ならざることの意から混同され、マコト⇄イツハリ、の対応関係も生じたものと思われる。

後者は、物語の作者を「そらごと」を言い馴れた人と規定している。物語は、全くの無から作り上げる場合は「そらごと」といえるとも考えられるが、ここでは、日常生活で嘘をつき馴れた人の意で、光源氏がいつも不誠実をなじられて仕返しに、女性軍に対する攻撃材料に用いたものと考えたい。

源氏物語以前頃の主な仮名文学作品について、総索引によつて、「そらごと」「いっはり」の用例を調べてみた。作品ごとの用例数は表Ⅱに示す通りである。古事記・万葉集に「そらごと」の用例がないことから、「そらごと」の方が後に使われるようになり、徐々に「いっはり」を凌駕して、意味の領分でも「いっはり」の語義を少しずつ侵蝕していき、ついには「そらごと」が全盛期を迎える

るといふ語史を想定することができる。ちなみに、狭衣物語では「そらごと」6、「いっはり」0、寝覚では、4対0である。

(句宮の従者が、薫の従者に) ことたがへつつ、空言のやうに申し侍りつるを(『源氏物語・浮舟』)

右の例は、「そらごと」を、事実を曲げて伝える意(すなわち「いっはり」というべき場合)に用いた例である。こうした用法が、源氏・枕の頃から表れるが、この頃から「そらごと」の用例が圧倒的に多くなるため、「いっはり」の領分に入り始めたものと解しておく。しかし、大局的に見て、源氏の頃にも、両語の差違は意識されていたものと思う。

以上の考察により、Aに「書きて」、Bに「いっはり」、Cに「書きて」を補うこととしたのである。

六 まとめ

「世に多かる虚言だに(書きて)あり(まして、偽りは多く書きてあり)。(さらば)人にもあらぬ身の上まで書き日記して(みなは)、(そは)珍らしき様にもありなん。」
右のごとくに考えて、解釈を試みると、次のようになる。

この世の中において、多く読まれている古物語の端々などを読んでみると、世間に多くある、不愉快な、作り事さえ書いてある（まして、事実を歪曲した嘘はなおさら多く書いてある）。（だから、私が）人なみのようでない（不幸な）身の上まで書いて、日記に作って（みたら、物語とは違った）珍らしい（新鮮で心を引かれる）様子（の作品）となることであろう。

世間の口さがない噂話が、悪意に満ちた「空言」や「偽り」に満ちていて、日頃から不愉快に思っていた作者は、世間の女性と同じように、つれづれを慰めようと、古物語を取り出して読んでみる。ところがそこには、帝の求婚を退けて月の都へ帰って行く姫といった現実離れした話や、美男美女が相思相愛、一夫一妻を守って花や蝶やと暮す優美典雅な作り話、といった「そらごと」と「いつはり」話ばかりが書いてあった。これでは「いとものはかなく、とにもかくにもつかで、世に経る」自分は満足できない。それなら、自分の身の上を偽らず告白して、人生の真実、就中権門の男性の妻となった一人の女の幸せと不幸を見つめ、書いてみよう。こんなふう

に決心した過程を記したものと解するのである。
もちろん、この序文が、最初に書かれたか、上巻執筆後に書かれたかという事は、これとは別問題である。

注

(1) 学習参考書を取り上げるのは不適當という見方もあるが、筆者は学参とも、いや初学の人をいざなう学参こそ、力を注いで執筆すべきであると考えているし、事実優れた学参も多くあるので、参考にした。比較の対象として取り上げることとする。

(2) 石田稔二「蜻蛉日記の序」(『国文学解釈と鑑賞』昭37・11)

(3) 梅野きみ子「平安中期仮名文学における『めづらし』と『めづらか』をめぐって」(『蜻蛉日記・枕草子の場合——』(『桐山女学園大学研究論集』第七号、昭51・3)

筆者も追調査したが、「めづらか」には思いがけないことにあきれ腹を立てるといった否定的要素が含まれるが、「めづらし」には否定的語感の認められる用例は皆無である。

(4) 「そらごと」「いつはり」の差違については、松村博司先生が講義中に述べられた事をもとにして考察を加えたもので、元祖は松村先生であることを明記しておく。

追記

初校の出る直前に、増田繁夫氏訳注『対訳日本古典新書 かげろふ日記』創英社、昭53・12、が刊行された。本稿で問題としている部分は、(一)―(1)に分類できる解釈となっている。